

## 「35年を振り返って」

2010年3月  
太田 安昭

縁は異なるもの……と言うが、……

絃武館にお世話になって、この3月で丸34年となる。

若かりし頃の私は、一生信州の田舎から都会に出ることなど想像すらしていなかった。

オイルショックに端を発した混乱は、巡り廻って私が東京に出る転勤命令に至った。

35年前の秋、布団袋1個と当面の着替えを入れたダンボール1個だけで上京した。

東京の生活にやっと慣れた翌年の3月、私の行動範囲では全く縁の無い代々木駅にふらっと降りた。

そして、足の向くままに絃武館の有る小路に入った。看板を見ると『杖道』……？？

引き返して、本屋で辞書を立ち読み。『つえ』である事をやっと理解した。

興味本位で道場に入り、中二階で見学しながら側の杖を手にはしていると、「降りて来て振って見ろ」

と声を掛けられ、普段着のまま見よう見真似で杖に初めて触れた。

その日に入門。杖2本と入会金、1ヶ月分の月謝をその場で支払い、杖、1本を自宅に持ち帰った。

この日以降、仕事以外の時間は杖に費やす生活が始まった。

人の知らない事、手順を覚えることが新鮮で、毎日が楽しかった。

数年が経ち、神道夢想流杖道の手順を一通り覚え、自分の中では得意満々になっていた頃、松村先生は

乙藤先生に、改めて師事された。そして、年に数回、先生が来館される様になった。

乙藤先生の神道夢想流杖道を学び、必死になって稽古に励んでいる、松村先生の姿を目の当たりにして

私の考え方が少しずつ変わり始めたのはこの頃からである。

私は「お手伝い」の名の下、朝に・晩に・夜通し時間の許す限り、乙藤先生の稽古と話を聞く事が出来た事は、今思えば大変幸せのことであった。

乙藤先生が会うたびに私に必ず言った事。

『登った山は降りるしかなか』、稽古は……『先を知ったらいかんとよ』であった。

このふたつの言葉は、私にとって一生の課題となり、杖はもちろん、私生活の指針とさせて頂いている。

乙藤先生が絃武館に伝えた、神道夢想流杖は江戸時代に使っていた、いわゆる昔の形である。

私たちは、それを習った。と言うか、その形に必死になって替えた時期であった。と、振り返って思う。

この様な大事な時期に「田舎(信州松本)へ戻れ」と会社から転勤命令が出た。

未練を残し、田舎へ帰った。

その翌年の春2月、江戸川での地区講習会の折に乙藤先生との会食が有り、ひよんな事から一筆戴いた。

それは、飲み屋の”お品書き”の台紙を拝借して、そこに筆でさらさらと書き、「持って帰れ」と言うものであった。

まるで、三行半である。

”左膳、山に籠る”

左膳とは、えびす膳とも言い

死人に上げるお膳のことである。

「お前はこれでおしまいだ」と言われた。と

当時は思った筈であるが、幸か不幸か、

乙藤先生の書。大事にタンスにしまい込み、

読み返したのはだいぶ後のことである。

もし、あの時、真剣に読み返していたら

その後の人生は変わっていたかもしれない。

おかげ？で、何も無かったかの様に稽古に通い、

大会、講習会にも参加した。

今になって改めて読み返すに、乙藤先生は、

『こんなに一所懸命に稽古したのに、やめてしまうのか。残念で仕方ない』と言って戴いたと勝手に信じている。

今では、私の宝物になった。

……「乙藤先生、今も杖を続けています。ごらん頂いていますか」……

そして今、

趣味本位で始めた杖。自分だけが上手になりたい、強くなりたいと稽古に励んできた。が……気がついて見ると、その趣味の域を超えてしまった。

背負ったものが重たい。歴史の重さが日増しに増すが、それをどうすれば良いか分からず、

毎日、時間だけが過ぎていく、今日この頃である。

一個人の趣味で始めた、この私が、この様なことを本気で考える様になった。

乙藤先生からご教授頂いた神道夢想流杖は、江戸時代に育った平時の武術である。

私達は、江戸時代の稽古体系を訓えて戴いたと信じている。

戦時の武術である、剣、刀はひとを殺傷する事を目的とする。

この刀という得物を持って、立ち向かって来る敵。刀で人を切る事に全身全霊をかけた敵の気迫に対し、

平時の得物である杖で、傷つけずに勝つ。打ち負かす、にはどの様な気力・胆力が必要なのか。

これを、養うにはどの様な稽古をしたら良いのか。

……しかし、それは暗中模索である。

少なくとも、技の出来栄えではない。技は出来て当たり前。その先の事である事は間違い無い。

これからが、本当の稽古である。と改めて思う。そして、後進の育成も大きな課題である。

特に、後進の育成は意識をせず自分の稽古だけをを行なって来た私には、今後の重点課題である。

受け継いだ、神道夢想流杖の技はもちろんで有るが、その稽古体系が素晴らしいと心から思っている。

これを是非とも、そのまま後世に伝えたい。

この実現の為、稽古を仲間と共に重ねて行きたいと切に思う今日である。

